

国連「人間」環境会議は「人類」環境会議であった
 —「持続可能な開発」の基礎としての「人類の福祉」の意識—
 The UN Conference on the Human Environment was based on the notion of
 the welfare of the human community of the Earth

宮田春夫(新潟大学)
 MIYATA Haruo (Niigata University)*

1. はじめに

1972年の国連「人間」環境会議に際し、「人間環境(human environment)問題」とは何なのかは日本では議論されたが、結局明確にされないままであった。しかし、それは、1993年の環境基本法の2つ目の上位目的の「人類の福祉」の視点から解明される。このことを国際関係論の立場から論じる。

2. 「人間環境問題」についての当時の解明状況

1972年に人間環境会議を開催することを1968年暮れに国連総会が決定した。しかし、「環境問題」と言えば、多くの人が亡くなったり回復困難な障害に悩まされたりするような深刻な「公害問題」への対処に忙殺されつつあった日本では、「人間環境問題」の概念を捉えきれなかった(金子、1972)。その解明のため、行政、研究、外交、報道の各界から集まって議論し、整理した結果が、会議直前に刊行された「人間環境問題とは何か: ストックホルム会議の理解のために」(国際環境問題研究会、1972)であった。しかし、そこでも、「公害」ばかりでなく、「天然資源問題や人口問題、漁業問題、さらには南北問題までも」(金子、1972)がその内容であるとしたものの、「人間環境問題とは何か」の解明にはほど遠かった。そして、その後は、「人間環境」という言葉自体が使われなくなり、それが何を意味するのかの議論も行われなくなった。

3. 1960年頃の「人類」の視点の始まり

アジア・アフリカの植民地が次々と独立し、それまでの国々と(形式上は)対等の(形式上)国民国家となった結果、それら国民国家の大半が集まる国連において、新独立国がほとんどである開発途上国の開発問題を全人類的立場で支援しようとの機運が生じた。これは、1960年代を「国連開発の十年」に指定すると1961年の国連総会決議につながった。

4. 1970年近くなつての「環境」への波及

その機運は環境にも波及し、「人間」環境会議を開催すると1968年の国連総会決議は、全「人類」の視点で環境問題を議論しようとするものであった。「人間」環境会議の開かれた1972年に出版された「成長の限界」(Meadows et al., 1972)も、全「人類」の視点から、地球の収容力の限界の問題を指摘したものであった。

しかしながら、この頃は、開発途上国が数を頼みに「社会の進歩と発展に関する宣言」(1969年国連総会決議 2542 (XXIV))、「天然資源に対する恒久主権」(1973年同 3171 (XXVIII))、「新国際秩序の樹立に関する宣言」(1974年国連特別総会決議 3201 (S-VI))など、世界経済を支配する先進国に対し開発途上国の利益を主張する文書を次々に採択させた時期であった。そのため、「環境」に関しても、十分に「人類」の視点を盛りこむことができず、「人類」環境会議と称しながら、その採択した宣言と行動計画(United Nations, 1973)には、そのような南北対立が強く反映され、「人類」の一体感を欠くものとなった。

5. 1974年のココヨク宣言と1975年のUNEP管理理事会決定

しかしながら、環境問題の重要性についての認識が開発途上国内にも広まり、他方で、国連環境計画(UNEP)のもの等、「環境」に関する各種国連会議の運営主体が、南北対立を持ち込む外交官ではなく環境担当官庁等の実務家に移行した結果、1974年にUNEPとUNTAD共催のセミナーで採択された「ココヨク宣言」は、「人類」の視点で開発途上国の開発問題と環境負荷から来る地球の収容力の限界の問題とを論じたものとなった。これは、翌1975年のUNEP管理理事会決定 20(III)「プログラムのポリシーと実施」に引き継がれ、この決定では、「人類」の視点から、開発途上国の貧しい人々の人間としての基礎的ニーズを満たすことと主に先進国の大量生産・大量消費・大量破棄から来る資源・環境負荷を地球の収容力の限界内に抑えることの両方を実現することを(人類の)「持続可能な開発」と定義した。

* miyatah@isc.niigata-u.ac.jp

6. 1980年のブラント委員会報告書—「開発」問題からの「人類の共通の未来」

開発途上国の開発問題を論じた1980年のブラント委員会報告書(Independent Commission on International Development Issues, 1980)は、開発途上国の問題は、開発途上国の人々だけの問題ではなく、先進国の者にとっての問題でもあるとし、「我々」とは先進国の者と開発途上国の者と定義した上で、委員長前書きの締めくくりにおいて、それを「我々の共有の未来(our common future)」の問題と表現した。

7. 1987年のブルントラント委員会報告書—「開発」と「環境」の両面からの「人類の共通の未来」

1987年のブルントラント委員会報告書(World Commission on Environment and Development, 1987)は、再度、「持続可能な開発」について UNEP 管理理事会決定 20(III)と同じ定義を行い(同報告書第2章の第1文が「定義」として広く引用されているが、同第2文の具体的定義は管理理事会の定義と実質的に同じであり、第1文は、むしろ、そのような「持続可能な開発」の効果を説明したものである。このことについては別稿で論じる。)、その2つの内容(開発途上国の開発問題と環境負荷を地球の収容力の範囲に抑えるべき問題)をブラント委員会と同じ「我々の共有の未来(our common future)」と表現して、報告書の名称とした。

8. 1993年の環境基本法の意識

1993年制定の環境基本法では、「現在及び将来の国民の健康で文化的な生活の確保に寄与する」とことと「人類の福祉に貢献すること」をその上位目的とした(第1条)。後者について、「環境基本法の解説」(環境省総合環境政策局総務課、2002)では、「今日の環境問題は、...規模や発生のメカニズム、必要とされる対応において一国の枠を超えたものとなっており、人類の生存の基盤である環境が大きく損なわれるおそれが生じている」ことのみをその規定理由としているが、開発途上国内に限定されている公害問題をも同法が対象としていることから、2つ目の上位目的は「人類」意識に基づいていると考えるべきである。議論は別稿に譲るが、「地球」環境問題も、実は「人類」環境問題なのである。

9. 結論

環境と開発についてのこのような歴史的経過からして、human environment という言葉は、全「人類」の視点で環境を論じようとしたものであることが明らかであり、「人間」環境会議は、環境基本法での用語に照らして、「人類」環境会議と訳されるべきものであった。

10. 今後の課題

ブラント委員会の意識をブルントラント委員会が引き継いだところに従い、開発途上国の開発と環境の問題を開発途上国の視点及び全人類の視点から見るのが重要である。そして、特に次の時代を担う人たちは全人類的視野を養うことが重要である。また、「環境」と「開発」は、対立する概念ではなく、「開発」とは何かを明らかにしてノーベル賞を授与された Sen(1999)の言うように「開発」とは「生活を良くすること」とほぼ同義であり、これは、国連「人類」環境会議の準備過程で言われたこと(United Nations, 1971; 島田、1972)の発展形である。この視点から、真の「開発」を求めていくことも、「環境」に関心を持つ者の任務である。

引用文献

- 金子熊夫、1972: ストックホルム会議の背景: 国連総会決定から開催まで(1968-1972年)、国際環境問題研究会(編)、1972(下記)、pp.14-27
環境省総合環境政策局総務課(編著)、2002: 「環境基本法の解説」改訂版、ぎょうせい
国際環境問題研究会(編)、1972: 「人間環境問題とは何か: ストックホルム会議の理解のために」、日本総合出版機構
島田仁、1972: 発展途上国の開発と環境問題、国際環境問題研究会(編)、1972(上記)、pp.243-267
Independent Commission on International Development Issues, 1980: North-South: A Programme for Survival, Pan Books
Meadows, Donella H., Meadows, Dennis L., Randers, Jørgen, and Behrens, William W. III, 1972: The Limits to Growth, Universe Books
Sen, Amartya, 1999: Development as Freedom, Alfred A. Knopf
United Nations, 1971: Development and Environment: The Founex Report, Founex, Switzerland, 4-12 June 1971
United Nations, 1973: Report of the United Nations Conference on the Human Environment, Stockholm, 5-16 June 1972
United Nations General Assembly, 1974: The Cocoyoc Declaration adopted by the participants in the UNEP/UNCATD Symposium on "Patterns of Resource Use, Environment and Development Strategies" held at Cocoyoc, Mexico, from 8 to 12 October 1974, document no. A/C.2/292
World Commission on Environment and Development, 1987: Our Common Future, Oxford University Press

キーワード: 人間環境問題、国連人間環境会議、人類の福祉、持続可能な開発、ブルントラント委員会